

おやすみロバ



通巻4号 2009年8月



けんちゃん

あれは、けんちゃんが卒園して、小学校に行き始めてしばらくたったころ。そう、六月頃だった。

私はけんちゃんの卒園とともに保育園を辞めた。だから、その後の彼の様子を知るすべは無かった。いや、その気になれば、無いわけではなかっただろうが、あえてそれをしなかった。私は以前のように介助の仕事に追わ

れる日々の中で、時々、けんちゃんうまくやれているだろうか、つらい目に遭ってないだろうか、と考えた。

ある朝、いつものように、
「よし！こうなったら！けんちゃん！がんばるぞー。」

と、ひとり、かけ声かけて起きた。そしたら、その日は、いてもたってもいられなくなった。けんちゃんのは、もう、飛ばたいっていつた鳩のように、私は自分の胸から飛び立たせたのだから、遠くで、祈ってほしいんだ、と自分に言いきかせてきた。でも、今朝は、とめどなく思いがあふれてくる。私はがまんできず、登校時間の八時頃を見計らって彼の通う八小に向かった。頭が沸とうしてやかん

一心だった。向こうから歩いてくる小さい子たちの顔をいちいちじつと見る。ちがう、この子はちがう。あ、似てるけどけんちゃんじゃない。長いこと会ってないから不安になってきた。といつても、たつた二ヶ月だ。小さな男の子は、さいしょ、全員けんちゃんにみえた。色黒のがつしりした子や、目の大きい子はとくに。そのたび、心臓がはちきれそうだった。

「あつ」

私は思わず立ち止まった。ランニングを着て日焼けした男の子と目が合った。くつきりと白い白目に大きな黒い瞳。黒いまつ毛がくつきりとふちどる。私はじつと見た。その子は少し私を見た。そして何事もなかったか

みたいに湯気をたてる。夢中で自転車こいでた。

八小の校門に着いてしまった。子供たちが次々と学校の中に吸い込まれていく。あたり前の朝が、流れている。そのわきに、ドキドキしている怪しいおばさんが、自転車を止めてたらずんでいる。我ながら、ここにつつ立っているのは不自然だと思った。だからといってどうしたらいいの？自転車をひっぱりながら、けんちゃんのうちの方角に歩いた。途中で、登校してくるけんちゃんと会えるかもしれないと思った。私はふるえていた。ほかの知ってる子たちや、大人と出くわすかもしれないなかった。「何やってんの？」ときかれたら何と答えよう。私はけんちゃんの姿を見たい

のように目をそらし、友達と話しながら、そのまま行ってしまった。私は雷に打たれたような気がした。地面にくずれおちるかと思つた。でもくずれおちず、立ちつくした。ぼーつと意識が遠のいた。しばらくしてわれにかえると、あの子はけんちゃんではなかった、とはつきりわかった。似てたけど別人だった。別人なのに知らんぷりされて、まるでけんちゃんにそうされたみたいにショックだった。けんちゃんにわすれられてしまったみたいに打ちのめされた。

(了)

かのんちゃんを待つ

くらくらする日差し。ゆらゆらするアスファルト。車はまばら。人の声も聞こえない。時間がとまったみたいな午後。ただ蟬だけ、必死で鳴いている。

大きな櫟の木の下で、私はいつものようにバスを待っている。かのんちゃんが乗ってく

る。安っぽい絵じゃなくて、力のある絵だし。きつと子供たちの描いたものだ。

バスはなかなか来ない。櫟の幹には蟻がよじ登っている。弱い風が吹いて、夏の日差しに耐えきれなくなった幾枚かの葉がカサカサいって落ちる。バスは、そのうち、ゆるやかに曲がりくねる道を揺れながらやって来るだろう。いや、車椅子の子たちの乗るバスだから、運転手さんは慎重に運転して、決して揺れないだろう。もうすぐ来るはず。

私は車道のまん中に出て、バスの来る方を見渡してみる。かげも形も音もない。道を渡って向こう側の塀の日陰にしゃがんで、また見る。日傘をさした人が歩いてる。大きなダンブカーが黒い煙を吐きながらやって来る。バ

る養護学校のバス。車体に大きな虹と赤や黄色の風船が描かれている。そんなことは、子供だまじらうか、それとも良いこと？わからないけど、私はこのバスが好きだ。かのんちゃんのはじけるような笑いや、ケロッとして、くよくよしない性格とよく似合っている。

スは来ない。

バスはいつも墓地の木立ちの向こうからやって来て、左にゆるやかに曲がっていく。すぐに右にカーブして、また左にカーブする道を静かに近づいて来る。実際には、この辺りは家々にかくれて、ここからは見えないのだけだ。

バスは、じきやってくる。ゆつくりと右にハンドル切る辺りでようやく雑木林のむこうに見えて来る。きつと窓がキラッと光るだろう。かのんちゃんは大きな目をパッチリさせて景色を見ているんじゃないかな。対向車線を行ってくるバイクを見て、につこりするんだろうな。

(了)





バラ

今朝、いつものように自転車をこいでいた。なんとなくどんよりとして、露草の青も薄くつて、ため息ついた。カーブを曲がった先にある大きな山桜の木。緑色の葉っぱに混じって、黄色いのが数枚。桜も疲れてる。夏が終わっていく。前に行くグレーの軽自動車

は、スピードを緩めた。こんもりした庭のある家の前に停車する。ここの中に用があるんだな。私は、のろのろと追い越していった。横を通りすぎるとき、なにげなく見るともなく運転席に目をやると、あら、びつくり。見覚えのある人だ。私はだいぶゆきすぎてし

まってから、くるつとUターンした。かけよって行つて

「お久しぶりです。」
と言った。

「ああ！」

まるい目とやわらかそうなほつぺたのその女性は、ほころぶような笑顔をした。そして、明るい声で、

「バラ、咲いた？」
ときいた。

彼女は、うちの近くで「桑の実」という八百屋さんをしていた人だ。バラ？すっかり忘れてしまっていたことが、みるみる鮮やかに蘇ってくる。バラ。うちの庭の白バラ。毎年、何の手入れもしないのに、びつくりす

る程、見事な花を、びつくりする程山盛りにつけてくれていた。いつも五月になると、数輪、切り取って、「桑の実」にも持っていた。彼女は、気さくで、ほがらかな人で、喜んでくれた。ご主人も、バラが好きで「上手に咲かせるのよ。」と話してくれた。そのご主人は、たんせいな顔立ちのまじめそうな方で、時々店を手伝っていらした。お二人とも心やさしく、善良な印象で、商売にある程度必要なかもしれない、にごった部分を全く持ちあわせていないようなかんじだった。そんなふうだからなのか、いやそうじゃない。次第に経営が難しくなり、「桑の実」は店を閉じた。二年か三年前の夏だった。

私は普段、あまり「桑の実」で買わなかつ

た。近くのスーパーは夜十一時までやっている。「桑の実」は、七時で閉まるので、間にあわないというのは確かに理由のひとつだった。だけど「桑の実」の低農薬や有機栽培の野菜は当然ながら、少し高かったし、何より、無機質なスーパーの方が気が楽だったのだ。気持ちでは「桑の実」を応援するつもりでいて、実際にはしなかった。店をたたむと知って、慌てて桑の実で買うようにしたりもしたが、それが何になつたのか。最後の日、棚の商品が、すっかりカラッポになつたお店で、「お元気で。」なんて言いながら、涙ぐんだ。内心では、私みたいな人間が、この店をツブしたんだとわかつていたので、ほかに何も言えなかつた。

のびこんできた。

目の前の彼女の笑顔は、バラに匹敵する程、美しく慈愛に満ち、感動的だった。私は何か言いたくて、何か、たくさん、こみあげてくるけど、言葉が見つからない。

「急いでるんでしょ、ありがとう。」

彼女が私を気づかってくれて、そう言った。私は仕事に行かなくてはいけない。でも、立ち去りがたかつた。「お元気で、よかった。」「お会いできて嬉しい」そういう言葉が、自転車をこぎながら、あとになって浮かんできた。

(了)

今年は、バラ、咲いたんだっけ？何の心あたりもない。私は心ずさみ、庭に目を向けることもなく、この夏をすごした。庭はあれ放題だ。九年前、ここに越してきて間もなく、私たちは、白いバラを植えた。私たちはスコップで大きな穴を掘った。買ってきた、栄養のある土をたくさん入れて、大切に植えた。次の年、桃みたいにふくよかで、純粋な人の心みたいな、クリーム色の花が咲いた。私たちは、二人で庭に出て、そう、あの頃は、「お」をつけて、

「お庭、見よう。」

と言っていた。二人で毎日のように白バラをながめ、顔をつつこんで香りをかいだ。夜になると窓から、バラの香りの風が、そつとし





水たまり I

雷の音。目が覚めた。まだ暗い。暗いけど少し白い。夜明けだ。

また、ゴロゴロゴロ、おなかに響く音。大粒の雨が激しく打ち始める。屋根を、葉を、草を、土を。風がゴオといった。ガラガラガラ。雷鳴は更に大きく、高くなる。怒りを増しているんだ。風は雨の髪の毛をむんずとつかんで、凶暴にふりまわす。バリッ。空が割れるような雷鳴。私は臆病な悪者みたいにう

ずくまり震える。すぎさるのを待つしかない。たったひとり。広いだれもない荒野にいるような心細さだ。

雨があがった。鳥のさえずり、バイクの走り去る音。一日が動き出す合図。

今日も自転車で行こう。厚く重たげな雲。濃くて密な空気。肌に、草々の吐く熱気と匂いがはりつく。いつもの小径を行く。自転車はガタガタいいながら、背の高い草の間をぬけていく。みちは右に折れ、そこからは下り坂だ。急に視界が開ける。

ワッ。いつものように勢いつけて、下ると、坂の下には、びっくり、巨大な水たまり。長さは十メートル程ある。ブレーキかける。そしてそろそろと水の中を進んだ。プクプク、

そしてチャラチャラ。水が笑う。自転車もこらえきれず笑ってる。私もつられて笑う。車輪の後ろには、長いドレスのすそのような美しい航跡。

(了)

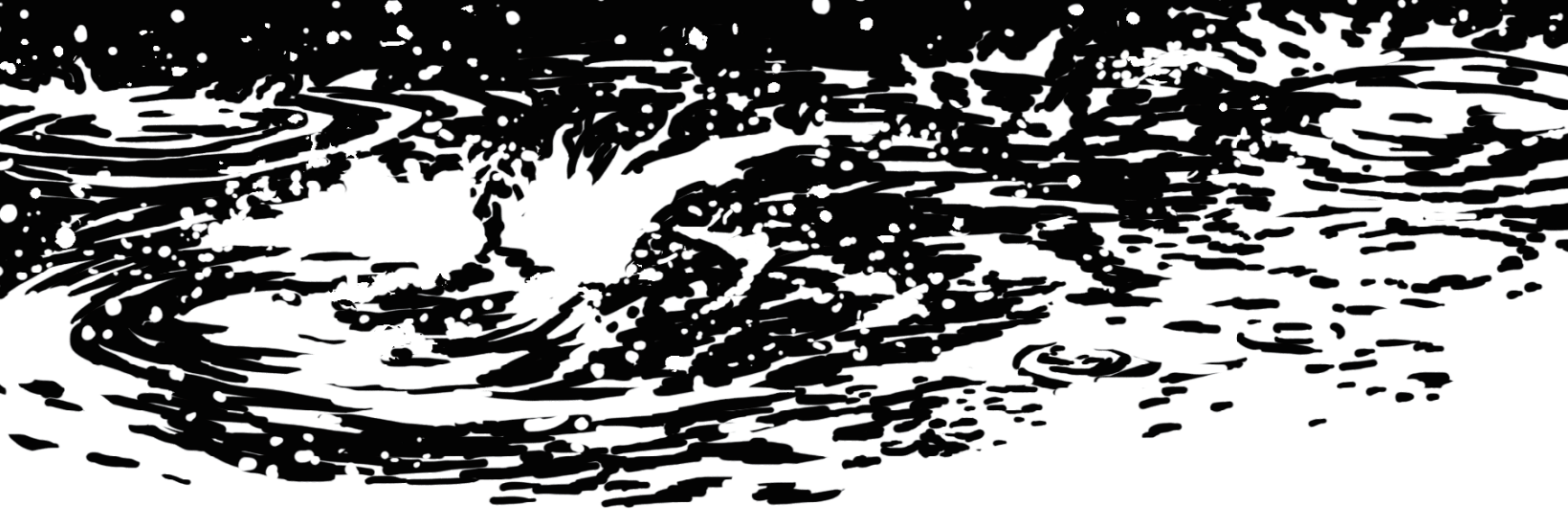
水たまりⅡ

子供たちと、大沢公園に着いたら、びつくり。巨大な水たまりが一つ、二つ、三つ、四つ。金木犀のまわりの窪地にできたのは、直径八メートルくらいあるだろうか。池だ。プール

だ。向こうの金木犀のそこは、直径三メートルくらいかな。えのきの木の横のはもう少し小さい。はらっぱのまん中を貫く小径はぬるぬる黒光りしている。

大人は、ヤバイと思った。まっ黒になると後始末がたいへんだ。と思う間もなく、子供たちは迷わず服を脱ぎ始めた。小さい子は待ちきれず、バンザイして「アー」脱がせて、と訴える。パンツ、オムツだけはしてて、と言っても、脱げる子は脱ぐ。

オーブリーが駆けていって水にとびこんだ。はねあがるどろ水。さとははしぶきをかぶってウェーンと泣いた。なつはゆつくりと踏みしめながら水の中へと入っていく。途中で蟻を見付けて「アリー！アリー！」と叫ん



でる。ルークは遠くからスピードをあげながら走ってきてすごい速さで水たまりのまん中を突き抜けた。水しぶきが鳥の羽のよう。エイデンはおわんで水を掬う。ベンはぬかるみの上を走ってすべったり、わざとすっこけて尻もちをついて喜んでる。はるくん、ゆいゆい、くるみは、どろをペチャペチャはねあげてジャンプしたり、ぬるぬるする感覚を味わいながら踊る。あいちゃん、イズイは体にどろをぬりつけ合ってまっ黒。クレアはそれを見て

「まっくるう」

と笑っていたらイズイに頭からドロ水をかけられてヘビメタの人みたいな顔になった。エイヴァは少し離れて草の方からにこにこ笑っ

て見てる。

みんなの目は異様に輝いてる。パンツをはいてる子はパンツが煮ものみたいな色になっている。

(了)

■絵本発売のお知らせ
「クリスマスのふしぎなはこ」

福音館書店
ぶん 長谷川摂子
え 斉藤俊行
定価 780 円



昨年 10 月に発売されました。ずるずるとおやすみロバの発行が遅れてしまってこんな間抜けな時期にクリスマスのお知らせすることになってしまいました。下の絵は、単行本化するにあたり差し替えとなって使われなくなった幻の一枚です。



おやすみロバ通巻 4 号

2009 年 8 月 1 日

著者 鶴峰まや子

挿絵 斉藤俊行

発行 工房水銀堂

水銀堂ホームページ <http://suigin.com>

© Mayako Tsurumine 2007

© Toshiyuki Saito 2007